Akita University

第25回　秋田大学教育実践フォーラム（2017年１月28日）特別鼎談

秋田の教育の未来を考える

佐々田亨三
由利本荘市教育長
浦野　　弘・佐藤　修司
秋田大学教育文化学部

■**佐藤**　よろしくお願いいたします．題名が「秋田の教育の未来を考える」という極めて大々的なテーマで，着地点がよく見えないような気もしますけれども，先ほどの浦野先生のお話を踏まえて，皆さんと考える時間になればいいんじゃないかと思います．

この鼎談ですけれども，最初に，由利本荘市の教育長を務められている，佐々田先生から実践者として，また教育行政にかかわってきた方としてどうご覧になっているのかをふれていただいて，それからのち，皆さん方からいただいた質問も含めて鼎談というかたちで，鼎談というか対談なんですけれども，やっていきたいと思います．佐々田先生のご経歴ですけれども，ご存じの方いっぱいいらっしゃるんじゃないかと思いますが，昭和43年の３月に教育学部，こちらの教育専攻科，学部のほうは社会科だそうですけれども，教育専攻科を修了されたのちに，中学校の先生をなさっていて，特に昭和55年，秋田大学教育学部附属中学校の教諭，そこでは研究主任や教務主任をなされていて，両方同時にやられたこともあるそうです．そこに10年ぐらいいらして，平成２年から指導主事で出られて，あと課長補佐ですとか，それから桜小学校の校長ですとか．平成10年４月に義務教育課長，平成13年から教育次長，平成15年，博物館館長，平成17年６月から由利本荘市で教育長を務められていて，現在３期目と伺っております．それでは佐々田先生から報告をお願いいたします．

■**佐々田**　はい．皆さん，こんにちは．ただいまご紹介がありました佐々田でございます．皆さんよろしくお願い申し上げたいと思います．ただいまご紹介にあずかりましたように，県の教育委員会がちょっと長かったんですけれども，その前には附属中学校におりまして，秋田大学の皆様には大変ご指導をいただきました．先生になって私はすぐ講師にも行ったものですから，そのときには附属中学校とこの大学がケーブルテレビで結ばれておりまして，ラボというかそういうのがありました．私は社会科でしたので授業するというと大変なんですよね．ケーブルテレビで結ばれているんで，みんな記録は取られるし映されるしと．そして大学の先生方はここにいて見られると．こういうことでございましたので，そのあとケーブルがどのようになったかはわかりませんが，今はないはずですね．その頃は，といっても半世紀前頃になりますかね．

さて私からはプリントを４枚差し上げておりますので，その４枚について大体15分程度お話をさせていただいて，浦野先生，佐藤先生にお譲りして，鼎談ということに入れればと思っているところでございます．

初めに，浦野先生に大変感謝申し上げるところですが，最終講義ということで，本当にお疲れさまでございました．心からお祝い申し上げるところでございます．由利本荘市にとりましては，先生には授業改善を継続的に進めていくための方略ということで，2009年においでいただいたり，「リアル熟議IN秋田」を本荘南中学校でこの年に開いたんですが，関東，東北，北海道では初めてということで，全国から集まっていただいてやった．直接に先生からもリードしていただいたという経緯がございます．そうしたことから，さまざまなご縁をいただいておりました．大学では特に，県の職員採用の課題であるとか，あるいは，教育臨床心理学等の開設のこと，それから附属小で私が学校評価委員，秋大では外部

Akita University

評価委員でしたが，そうした関係．それからGPシンポジストとしてお世話になったときの，さまざまなご縁をいただいて，本日を迎えているわけでございます．

まず私は，秋田の未来を考える一つは，秋田県人って何なのかということと，それから，そういうトータルなこととは別にして，どんな歴史，経緯，きっかけ，ショックがあったのか，その中から何を学んでこんにちに生かしているのか．一人一人の胸にどうなっているのかということを，常に教育者は座右の銘におかなければいけないのではないかなというのが，私の一つの発想であります．

まず，ショックを受けた一つは，秋田県知事，権令以下の明治維新に遡らざるをえないのではないかなと．行政組織とそうした関係がございますので，そうした関係からひとつ初代，島義勇（ぎゆう），義勇（よしたけ）が以前，札幌開拓から土崎港を国際港にと主張した議会での有名な演説もありますし，２代目の杉さんが杉という名前のごとく松蔭に師事して，明治維新のさまざまな周辺を学んだ知事にわれわれは仕えた．この意味を，こんにちどう持つかというようなこともあります．３代目は国司氏でありました．これも長州で，４代目石田氏は高知で，５代目赤川氏は長州，明倫館出身であります．そうした明治初期の秋田県をどう作ろうとしたか．その頃の県民は「仕方がない」とか，「当然だ」とか，いや，「こういう人が殿様になってきているのか」とか，そういう一般の方々も大きな評価なのではなかったのかと思います．

翻って今，これをどう評価していかなければいけないのか，そこに何を学んで，これを主体化して，歴史にどう子どもたちをつなぐかということは，教育者にとって大きな課題なのでないかなと思っているところです．今，学校，教育委員会への視察が，全県で非常に続いているわけですね．この25日に高知県から県の指導主事の方が来ました．そうしたら，由利本荘の地域を見て，いや，道路，子どもたちが歩いてない．人もあまりいないと（笑）．秋田の子どもっていうのは勉強するそうで，みんなうちに入って勉強しているので道路にこのように子どもいないんだな，このように理解してくれました．私は，そのとおりだと（笑）．これも高知にかつて学んでいるのですと答えて，石田英吉という人なんですが，その話をしたところでもございました．いずれ，こうしたことで明治維新のショックを受けた．皆さんにそれぞれ歴史的なショック，衝撃的なことがあるかと思います．その濃度をどう歴史的に自分のものとして捉え，子どもを導いていくかという，一つの人としての問題なのかもしれません．

二つ目は，これも大きな出来事だったのですが，43年ぶりに行われたテストです．私は県にいたので，待ちに待ったテストであったのです．私が教員になったとき，初任者研修のテキストが手刷りで作られた時期です．その手刷りの初任者研修テキストの１ページ目から，学力の挽回をしなければいけない．歴代の教育長が真剣になって，取り組んでいるんです．それまでは，さまざまなかたちで下位に甘んじていたのをどうするかと．測定の仕方も違います．農村，山村，漁村，それから僻地，都市，そういうようにして積算の仕方は違いはあるんですけれども，それなりのさまざまなデータが出ていたわけですが，それをどうするか．われわれ初任者に対して，勉強をまじめに教えろよと，こういうことを言うんです．私が県に行ったときに，ある教育長と学校訪問すると，その教育長は必ず僻地の学校に行きました．僻地の学校に行く者，子どもは行ったお客さんの顔，見たがるでしょう？こっちを見るとその教育長，こっち見るな．ちゃんと黒板を見て勉強しろと言わんばかりでした．私はそれを見て，いや，私も田舎の出身なものですから，子どもが行けば当たり前にお客さんを見るでしょうと言いたかったけれども，教育長がそうするもんですから，やっぱり勉強する雰囲気が高まりました．

そういうような具合で，歴代の教育長さんたちにとっては，秋田県の学力を上げるというのはかなりの念願であったわけであります．私が県に行ったときにも，さまざまな施策を講じようとしたことは事実です．チャンスだと．43年ぶりにというのは「待ちに待った」なんです．これをわれわれは先生方に校長会があるごとに説いて話をした経緯がございます．

学力向上の施策については，網の目のように上からばしゃっとネコ，ネズミを取るように，ネットをかけるように，さまざまな角度から隙がないような対策を講じたということは確かであります．ですので，決して一般的に言われているように，早寝早起き朝ごはんという生活習慣からだけ学力を論じたり，あるいは願ったり，あるいは評価されたりする

Akita University

と，私はちょっと心外であります．学力トップに施策ありや，なきや．ありなんです．その施策が行き届く体制というものが，今，他県で非常に参考にしてくれています．一つは，三重県などはその参考を率直に表そうとしている県でないかと思っています．つまり県，市教委，学校保護者の一体化，これを学校に届くにはどうするかということなんです．本県の場合は義務教育課，各教育事務所，出張所，そして市教委，学校，義務教育課，県教委，出張所から学校にも行き，出張所から市教委をわたって学校にも市教委も当然学校にも行く．そういうルートが明確になっています．しかし，そんなルートが明確になっていないところがいっぱいあるんです．これが出張所，そしてまた事務所，出張所の保持，管理，維持が課題という時代もありました．人事配置問題もあったんですけれども，学校に行き届く政策がいろんな段階で行き届いて一人一人に届く．私はそれをサテライト体制とも呼んでいいのではないかと思っています．分校とは違います．分校は，本校があって分校止まり．それから広まらない可能性がある．だから私は，ちょっと語弊がある表現になるかと思いますが，例えば秋田大学に（本荘由利地域に分校がないから言うわけではないんですが（笑）），横手，男鹿，北というように分校があるんですが，何とかひとつその大学のさまざまな動きがわれわれ由利本荘にも伝わる，サテライトシステム分校という名称で新たに構築をしてもらえれば本当に喜ばしいなと，このように思っております．

由利本荘市，ちょっと別に言いますと，面積が広いです．ただ最近，宝島社の住みたい都市，東北でトップになりました．ついに鶴岡を抜いたんです．鶴岡にも近世期の藩校がある．われわれのほうは，藩校三つあるんです．全国には藩校サミットなんていうのもあるんですよ．今回14回です．由利本荘市は開催地に立候補してきました．17回目あたりにやれそうな感じがしているんですが，来年は加賀百万石のところでやります．再来年は萩藩でやる．そのあと，狙えるかどうかわからないけれども，可能性はあるよと言われましたので，何とかはさんでもらえればいいかなと思っています．かなり有名なところの間にはさまるもんですから，これは大変だなと思っています．時間もだいぶ進んできましたので，2番目はこの程度にして．

私は，やはり学習指導の徹底というのが，この秋田のねらいにとっては非常に大事だ，このように思っています．これを今，単元や題材のまとめの中で，子どもたちが何をどのように学ぶか，何ができるようになるか，ここのところですね．今，どちらかというと学習指導要領のポイントも，学習指導内容から学ぶ，どのようにという方法論になってきているのが，この学ぶ子どもの自立，主体化，世に出て何をするか，志をどう立てさせるかっていうのが主流なことになってきていると思います．浦野先生もこのことをお話しされましたので，私は単元のデザイン，学びの地図，そのためには指導マップの必要性が非常に問われるのではないかなと思って，補助資料として「秋大研究所報第26号」これは，だいぶ前のものです．私が附属中学校にいたときなんですが，江戸時代の文化の指導マップです．これはあくまでも指導マップで，指導の地図だとか，今はやりのそういうのとはちょっと違います．違うけれどもこのように立てて，どこを子どもの自立の学びに導き，伸ばすかとか，これは協議が必要になるかと思います．そのためのマップ作りは，「単元マップ作り」の必要はあるだろうと思います．

この裏のページをちょっとご覧ください．この近世の文化のところには，秋田の人たちが登場してきます．平田篤胤（あつたね），信淵（しんえん），小田野直武，安藤昌益，それから，皆さんご承知のように，伊能忠敬でも，道川海岸等，実際に測量しています．そうしたことを教材化するには，秋田の学びなど，指導資料がなければ非常に難しくなるのではないかと思うんです．

ということを考えると，この学習指導の徹底は，やっぱり教師が単元のデザイン，学びの地図の作成，協議しあって，そしてやっていくということの大切さが浮かび上がると思います．

4番目ですが，教育環境等，図書のことです．これは「ふるさと秋田の学び」を出してから，20年経過いたしました．来月20年のお祝いをすることにしています．この「ふるさと秋田の学び」だけを注目されると困るんですが，その前に教育センターから「環境への誘い」が出ています．その平成7年には「ふるさとの歌」が出ている．秋田県にはいろんな作曲家がおります．ここの秋大の卒業された方々もいます．教卓を「やっとこ，やっとこ，くりだした」と，このようにたたいて教えていた人は小田島樹人ですね．おもちゃのマーチを作曲した人ですが，そ

Akita University

の人はここの出で，教鞭も取っておりますし，全国的に有名な方です．これが「さくら郷土史」です．まさに「ふるさと秋田の学び」は定本として活用され，これからの指導デザイン，単元デザイン等にも大いに活用されるかと思います．

さらに加えて，私は非常に大事なことは，アクティブラーニングは，きちんとした内容と活動，それから子ども同士のかかわりが明確でなければいけないだろうと思います．私は，自分の実践例を皆さんの手元に裏表で差し上げたんですが，一つは裁判の問題です．この裁判は三審制，中学校で裁判をそんなに学ばないのに，高校でもそんなに学ばないのに，ましてや大学でも学ばないのに，今，国の裁判員制度に国民は参画している．やれるものでしょうか．私はそこも疑問なんですが，私がかつての教え子に提案したのは，これは公開研究会のときの指導事例ですが，まず裁判所を見学させています．4時間ぐらいかかっています．裁判所見学をして，この授業を展開してみたんです．やるんだったら全部きちんとやらなければいけないだろうと思うんです．

私は，学習指導要領の改訂って何だ，改訂は骨を入れてやらせることなんではないかなと思っています．そういう点でわれわれがどのようにそれを取捨選択して，子どもとともに歩む，そういう姿になっていくということは，これはもう骨身を削る思いをしなければいけないんだろうと思います．そういう意味で，きちんと子ども同士のかかわり，資料の吟味，そしてまた現代の問いと教材と，それから子ども発想が重なり合うように教材というものは構成されなければいけないだろうと常に思います．

裏側を見てください．これは中学校2年生のアメリカの独立．これは校内研修で，全員の先生方に公開して，授業研究を求められたものですが，私はこのときにアメリカの独立をやりました．アメリカがどこが独立したかと，13州だ．13州が，その前はアメリカ，インディアンがいたはずだけれども，インディアンは独立をしないで，ただ抵抗して，アメリカの13州を中心に，なぜ13州の人たちが独立したのか．それは自由と平等かもしれないけれど，インディアンは自由平等って言わなかったのかとか，そうしたことを重ね合わせながら，この教材化に取り組んだいきさつがございます．いずれ，子ども同士のさまざまなねらいも，今のアクティブラーニングの中に非常に多くあるわけです．その計画，デザインから具体的な計画をおろそかにして，自らの子ども観，教材観をぐらつかせては，またまた別の学習指導法が早まるということになりはしないかと心配はされます．しかし，結論的には子どもたちにどう学ばせるかということがあるし，このアクティブラーニングは子どもたちにいろんな考え方，それから改めて学ぶ必要性を問うているということ，主体的な学びと連動させるということで，大いに評価はできるのではないかなと，このように思っております．

最後でございますけれども，本県はさらなる一体的な教育施策の充実を考えれば，未来の教育は明るいものになるし，私は，学校の教師には，お医者さんと比較してもらって，われわれには聴診器も薬も手術もできない．投薬もできない．「子どもと話をし，保護者と話をしながら教える」，それが武器なんだと．ということで，大いなるプライドを持ってほしいなということを期待して，話を終わりたいと思います．

■**佐藤**　ありがとうございます．最初に浦野先生からお話されたアクティブラーニングですとか学力，教育方法，そういったことが具体的に秋田県において，どのように形成されてきたのか，その中心にいらした佐々田先生のほうから，その背景にあるもの，また取り組まれている状況についてお話しいただきました．佐々田先生のお話について，いろいろ細かなところで，ご質問もあるかと思いますけれども，また時間の関係もありますので，もう少し，浦野先生の話と重なるようなところで，このあとの鼎談のところで，進めさせていただければというふうに思っております．皆さんから質問いただいているものをまず紹介して，というふうに思います．

最初は学びの在り方，アクティブラーニングのことを中心にして，質問をご紹介し，浦野先生にお答えいただいて，それにかかわって，佐々田先生のほうからコメントのようなことといただいて，何かあれば挙手，お二人でやり取りをしていただいて，それで，そのあとに研修，どういうふうに今の教育を伝承していくのかというふうなことに続いて入っていって，時間内に終わらせていきたいと思います．時間があれば今日は，教育実践研究支援センターの今後の在り方とか，附属学校，公立学校，また秋田県の総合教育センターですとか，市町村教育委員会とのかかわりとか，そういった全体のシステムの中で本センターが今，どうあればいいのかといったと

Akita University

ころも，少しふれられればいいなというふうには思っております．

最初に学びの在り方といったところで，いくつか出ていて，基本的には共通する部分が多いんじゃないかと思いますが，少しメモを取っていただいて，お答えいただければと思います．

一つ出されているのは，「深い学び」ということが出されていて，その深い学びといったときに，具体的に教師の姿とか子どもの姿というのはどういうふうにあればいいのか，具体的にどういった姿であれば深い学びというふうに言えるのかといったところを，もう少しお聞きしたいというふうな質問かと思います．

それから２番目は，思考についての話があって，でも知識がなければ思考も生まれないということなわけなので，その知識を思考のエビデンスとして作っていくためには講義形式も大切なのではないかと．先ほど浦野先生の話の中でも，単に活動的であればということではなくて，きちんと落ち着いて学んでいく，脳が活性化していくということも含めてアクティブというふうに言えるんだ，というお話も出されていたかと思います．講義形式も大切なんではないでしょうか．

それから楽しい授業，学び続ける教師という話の中，そういった話がありましたが，浦野先生にとって，いい先生，これも非常に答えにくいところと思いますが，いい教師，それはどういった存在か．どういった条件があればいい教師というふうに言えるのかということなんでしょうかね．そういったところも少し，佐々田先生も含めてお考えあればというふうに思います．

最後に，特別支援学校の場合は，より興味関心があるような学習内容でないと授業が成り立たないということもあるので，特別支援学校とか学級といったところのアクティブラーニングと，そうでないところ，違うのかどうか．特別支援学校におけるアクティブラーニングというのは，何か特別に考えるべきところがあるのか，これはまた専門の特別支援の関係者じゃないと答えにくいとこがあるかもしれませんけれども，そういった点についてちょっと，補足も含めてお話しいただければと思います．

■浦野　はい．先程，どんな活動が見られればいいかっていうこと，これ皆さんのお配りの資料だと３ページの10番のところにこれと同じのがあります．子どものところにこういう，こちらのような姿が見られれば，一つ学びはあると言えるのですが，こちらだけを目指していると，深くなる確率は低いのではないかっていうのが，先程お話ししたところだと思います．要は，不参加でないということですよね．それとやってみたあと，子どもがどう思うか．再び続きをやってみたいだとか，もう一回やってみたいだとか，満足であるというようなことですよね．動機づけで私たちが知っている「外発的動機づけ」と「内発的動機づけ」で，当然「内発的動機づけ」でなければ難しいというところですよね．他にも「ARCSモデル」という動機づけのモデルがあります．A，R，C，Sで，４段階で動機づけがあって，そうすると最後に「やってよかった」っていうところをゴールにすべきではないかというものです．私たちは，授業するときのどこに一番重きを置くかというと，おそらく，特に若い人ほど導入で頑張って，その先がだんだん尻つぼみになっていく．そうではなくてゴール，途中で例えば，この問題ができると，こんなことができるようになるよというゴールを示す．そしてゴールに本人がたどり着いたとき，例えば理科の授業は一番明確だと思うのですが，中学校理科で，植物の勉強をしていたら，次に天体のところに移りますよと．明らかに単元が変わるわけですよね．そういうときに，「もっと植物のことを勉強をしたい」，「続きをしようよ」と子どもが言い出すようなことが，ARCSモデルでいうと，うまくいった例になると思うのです．そういうところを日頃，私たちが目指してやっているかどうか．ここに書いてある，左側のほうの姿が見えるようになってくるんではないかなと思うのです．要は姿で語るとしたら，こういう姿が見えること目指しましょうということだと思います．

それと，講義形式．当然両方とも必要で，日本のこれまでのいろんなもの，例えば，先程指導案をお見せしましたよね．学生の日誌．あれは昭和55年です．古い方はご存じだと思いますが，その直後ぐらいから，教師は「教える」のではなく，「支援するんだ」という話になってきて，指導案も支援っていう表現になり，平成になるとそれが非常に強まったわけですね．先程の話はどうもその時代に指導案が変わってきたような気がする．話を戻して，ここで何を言いたいかというと，そういうことが出てくると，日本はムーブメントみたいな感じで，全部そっ

Akita University

ちにシフトしすぎてしまう．片一方はつぶれてしまう．ものごとを考えるときには，ベースがなければ考えることはできないですから，教えるということは当然必要です．たし算ができなきゃ九九はできないわけです．九九を覚えていなければ，いろんな応用問題はできない．だから，九九を暗記することは要らないということではないですね．それと同じように，学びに階層構造があるわけですから，当然この学びをするために，前提条件というのが何かわかっていなければいけないということ．それは当然学ばなきゃいけない．それは多くの場合は，教えるに近いのかもしれません．その学びの最中に，先程言ったような小さいところでアクティブな活動を入れる必要はある．それは主としてその時間の大部分は学び取ってもらうところ，私たちが持っている知識を子どもに伝える，伝承する，伝授していくっていう部分も必要で，それと同時にときには問題解決をする．さっきの私の演習で言えば，課題がわかったからこれをどう解決してくかっていうことを組み合わせる．両方大事で，半々でいいかどうかという，その数え方も難しいし，気持ち的には半々ではないかと思うんです．

それと次のところで，いい先生，これ，難しいですね（笑）．多様にあると思います．一つは今も，若い人がなかなかできないのは，子どもの気持ちがわからない．授業している子どもがわかっているかわかっていないかということについてだとか，子どもがわかんないときに，われわれが取る手立て．一通りじゃなくて，多様な手立てを思いついて，そこから選択できるような多くのレパートリーを持っていて，瞬時にこうやるってカードを切れる．そんなようなことができる力を持っている先生が，授業をする上でのいい先生ではないかなと思います．

特別支援についても基本的には同じだと思うんですよね．やはりもともと特別支援の授業って，活動する部分が非常に多かったと思います．それと先程のグラフを読んでもらった，先の問題解決について少し話したいと思います．私達がやらなければいけないのは，今教えている子どもたちがこのあと20年後，この街を背負っていくわけです．ちょっと言い方がよくないかもしれませんが，トップクラスは今の状況だと秋田から出て行ってしまうかもしれない．その次の人たちが，この秋田市なら秋田市，由利本荘市なら由利本荘市を支えていく人になるのではないでしょうか．その人たちが今の地域の課題を解決できるよう力をつけさせることが，私たちの仕事だと思うのです．だからある意味，生きる力というのはそういうところではないかと思うわけです．

前置きが長くなりましたが，特別支援のお子さんたちというのは，まさに今目の前で，ここで明日どうやって生きていくか，この数年後どうやっていくかということも一つ大事です．だけどもっと先で，この先何十年と生きていく間のところで何が大事で，この子たちがどう育っていってほしいのかという願いのもとに，どんなことができるか．また，どんなことをさせてどんな力をつけさせるかということを，全教員で共通理解して，やるということがおそらく大事ではないかなと思うのです．

共通理解ということでいうと，学校が上にいけばいくほど分業化しすぎていて，子どものことをあまり考えていない．大学の教員もおそらく同じで，そういうところにもっと気配りをしなければいけないかなと，私も反省しているところです．以上でよろしいでしょうか．

■佐藤　はい．ありがとうございます．あと佐々田先生から少しコメントをいただいて，浦野先生に対して，また佐々田先生から質問をするというかたちでも構いません．少しお考えのところをお聞かせいただければと思います．

■佐々田　はい．私は，いい教師と深い学びについてちょっと例を挙げてみたいと思います．

例えば，東京都を学ぶときに，ごみをどう処理しているかということをとおして東京都を学ぶことがあります．教材でそういうのがあります．ところが子どもの発想は，全くそういうことは考えてないんです．何を考えているかというと，東京都には芸能人がいっぱい集まっていると．その土地に教師が，その芸能人の住居，それから通ってきている通路だとか，年収だとか，そういうのに価値を見いだして，教材を工夫できるかどうかです．私は教師のよさ，あるいは教師がどうのこうのっていうのは，そこにかかっていると思います．

もう一つは，例えばみんなと一緒に遊ぼう．これは私が指導主事のときにしたのは生活科です．みんなと一緒に遊ばない子がいるんです．こちらのほうでですね．先生は困って，研究授業ですから．まず呼んでこいと，友達をやるの．友達はすぐ帰ってきて，来ないって言った．また呼びやる．来ない．そ

Akita University

れでついに先生が行くんです．そのときの様子ですが，先生が行ったときにその子どもは，泥のところに手をやって，「先生，あったかいよ」って．そのときに教師がどう反応していくか．恐らくは，「いや，そんなことよりもまずこっちのほうに来て，みんなとやるんだよ」と引っ張っていく．いや，泥もあったかい．でもそこにある石，もうちょっとあったかいかもしれないよと言って，石に座ってごらんと言えるか．あるいは石ではなくて，今みんなと遊ぼうという時間ですから，みんなと手をつないだときに，友達の手のあたたかさをもっと確かめてみようねと言えるかどうか．私は，教師の力というのはどこにあるかというと，そういう対応力，これがカリキュラムマネジメントに当たるかもしれません．

もう一つ，無事故記録っていうのを小学校でよくやっていますね．交通事故の無事故記録．そうすると，もう教科書どおりの展開が一番見て多いです．カーブミラーの清掃，ストップマーク，それから，うちからちゃんとみんなに声をかけて，お父さん気をつけてとか，こう言うとか何とか．そんなの，教科書見ればみんな書いてあります．ではどういう設定の仕方，構成の仕方をしなければいけないんでしょう？その子どもと，無事故とをかかわらせなければいけません．さっきの泥水の温かさと，友達の手のぬくもりと同じように．かかわらせるにはどうするかというと，その子も，例えばこの間新聞に，どっかの市町村の無事故記録2500日がありましたが，2500日に，その子も貢献しているということです．その子が貢献している．事故にあえば無事故記録にならなかったわけですから，けがしてもね．ですので，問題の立て方として，僕も事故を起こさなかったから，無事故記録は2500日達成されたのです．そういう学習課題を立てさせて，一人一人が学ぶ必要性を捉え直させるということは，大切になると思います．

そうすると教科書の，あるいは指導書のああいう書き方がいかにわれわれの教材研究，それから子どもと乖離しているかということです．子どもに学習が成立してないんです．それをさせるのが，われわれの仕事なんです．ですので，毎日の課題を自分でカメラで撮って，そして検討してみたほうが私はいいと思うんです．でたらめとは言えないと思いますが，プロらしくないことをただやっているか．これがわれわれもこれから生きていく，教師として生きていく糧だと思うんです．ですので，アクティブラーニングは，私は複雑だと思いますよ．いろんな思想が入り込んでいると思いますから．ただ，手がかりはそういうところにも訴えているんでないかなと思えば，評価できる．

それから，先ほどの特別支援の関係ですが，これは今，コミュニティ・スクールのことをしゃべりませんでしたけども，やっと特別支援学校も秋田県でコミュニティ・スクール化に動いている学校がありますので，ご安心ください．というのは，もともと地域と，あるいは病院と，社会と一体となって，私が県教委にいたときもそうでしたけれども，批判もされました．日赤のところに特別支援学校を作るっていうと，いや，これは集めることになるって，そこに行かせることになるということもありました．しかしそれは医学界，それから教育，そしてそうした特別支援の子どもたちの医療行為を一体となった，そういう連携ですよ．コミュニティです．コミュニティ・スクールです．そうしたことからの取り組みを行政的にもやってきているんです．まず基本的でさまざまな事柄で施策を講じていかなければ，私はいけないと思っています．そして，それこそが共生社会である．共生社会の真意を，この特別支援学校にわれわれは総力を挙げてやる必要があると思うんです．それは，行政や研究機関の大きな課題だと思っています．

■浦野　はい．特別支援のところで続きをお話しすればいいのかもしれませんけど，さきほどの佐々田先生のお話を聞いていて，私が少しメモしたことです．

私がさきほど実習の記録を示したのは，そういう先生になってくださいというつもりです．ということです．次に，エピソードの中で閉回路テレビの話が出ました．CCTVは閉回路テレビといいます．ケーブルは私が赴任したときにはまだ残っていまして，奥羽本線の下を通っていて，そのケーブル引くのに苦労をして許可を得たらしいんです．それを取っ払うのにまた問題があって，時間がかかりました．既に今はつながっていません．

今，指導マップというお話で，おそらく私は先生方も教養，読書だとかそういう背景がないとできないと思うのです．今のお話も半分は，われわれの教養がいかにあるかどうかが大事で，若い先生方，特に本を読むということが大事かなと思うんですよ

Akita University

ね.

それと「温かいよ」と子どもが言ったというお話，ありましたよね．それについて，私は同じようなことを言っています．私の言い方で言うと，教師の対応，または教師の意思決定のレパートリーがいかに広いかということが大事だと思うのです．それは子どもをいかに知っているか．発想が貧困でなくて，多様なものを持っているか，拾えるかどうかというところですね．そういうレパートリーを広げることが，私たちの仕事ではないかと思うのですけども，いかがでしょうか.

もう一つ，さきほど授業の記録を取ったほうがいいと佐々田先生がおっしゃっていましたよね．附属小学校の例で，私がちょうど校長をしているときだったのですが，4，5，6年生で同一の教材，1，2，3年生で同一の教材で道徳の授業を進めたことがありました．その授業が終わったあとの板書です．急いで見せますから，中身を見て下さい．スタイルが違うところが出ています.

（間　4年生～6年生までの板書をプレゼン）

■浦野　4年生，5年生，6年生やった授業の記録です．同じではないですよね．同じ授業をやっても，板書がこれだけ違うんです．だからやはり授業が終わったあと，ねらいや内容，そして板書をどうしていくかということを，例えばちょっと上の方がコメントをしたりするだけで，そういうことが教師の大きな学びになると思いますね．そういう文化が学校の中で残っているかどうか，というのがすごく大きいのではないかなと思います．特別支援についてはまた話題になったときに続けたいと思います.

■佐藤　ありがとうございます．いろいろとお話を聞いていて，アクティブラーニングとか，はやりで出されてきているもの，かたちだけ見ると単純に適用して，それが可能なのかどうかというふうに思いがちですよね．現在指導要領で入るので，時々教育新聞などを見ていると，アクティブラーニングは学力格差を助長するんじゃないかとか，そんな話を書かれていることがありますが，でもそれは，教員としての基本ですよね，教材研究にしても，子ども理解にしても．そういったものをきちっとやっていく中で，結果として出てくるのが深い学びというふうに考えると，特別支援だから難しいっていうことではないのかな，という気持ちもします.

次に入りたいと思いますが，この研修といいましょうか，教員文化をどう受け継いでいくのかといったことで質問が出されています．特にこれも何度か出てきましたが，年齢層が秋田県では非常に大きなアンバランスを生じていて，40代はある程度はいるにしても，30代とか，そういった層がごっそり抜けている．そういった状況がある中で，どういうふうに伝えていくのか．若い先生方に意識してもらう方法というのが，どういった手立てがあるんでしょうか，という質問が出されています．そのあたり，どういうふうに，これまでの教育遺産を受け継いでいくのかという手立てですね．校内研修ですとか，そういったことでつないでいくとか，日常の実践の中で伝えていくというふうに，単純には言えるのかもしれませんが，そのあたりをもう少し具体的にあればということかと思います.

それに関連するわけですが，研修の中でもワークショップもそうですが，グループ討論とか対話型の内容というのがよく行われています．そういう研修の方法の面で，実践知を継承するためにどういったことを意識するとより効果的に継承が可能になるのかという，その方法的な部分も質問として出ていますので，お答えいただければと思います.

また若手についてというのは，また別個にお答えいただくとしますかね．とりあえず伝承といったところで，お考えをお聞かせいただければなと.

■浦野　伝承は難しいと思いますけれども，若手と関連した話をしたいと思います．先程私が話した，「若手が話を聞いてくれないから，上の方はそっぽ向いてしまうかもしれない，言ってもしょうがない」というところに関して，私は職員室での語らいが少なくなっているということに原因の一つがあると思うのです．ベテランの，あるいは退職される先生方が若手だった頃の職員室の語りと今はだいぶ違うのではないかと思うのですね.

例えば，私は東京で教員になったとき，職員室の隣に当時40代ぐらいの体育の女性の先生がいて，結構しょっちゅう声をかけてくれた．当時は，道徳の授業は各クラス全く独自．学年7クラスあったのですけれども，自分で教材を選んで自分でやっているから，隣のクラスでは全く別のことをやっていて，それが許されたんです．道徳をほとんどやってないんですよ，現実には．学活に化けているというのが，私の勤めていたところの実状でした．そのときにどうしたかというと，お隣の先生は自分のクラスで

Akita University

やったら，「この教材を使ったよ，あなたも使う？」と言って，私のクラスの分も持っているんです．「ください」と言うとそれをくれる．そのときに，「こうやってやるといいよ」という一言，二言があるんです．そういうのを何度も経験しました．それは聞かなければ教えてくれなくて，私から盗んでいけというようなことでした．そういう語らいで，空き時間に職員室へ行くと，随分ばか話もしていました．それが許されたこともありますけれども，例えば，うちの車がどうだったというような話もした．一方で自分の失敗談を語ってくれます．うちのクラスでこうやったら，こいつがこんなこと言って大混乱になったとか，こいつがいつまでも言うことを聞かない，というようなことを話しながら，失敗談を，これやんなきゃよかったね，これを言ってしまったから，あいつが乗ってきて，結局時間かかった，みたいなことをしょっちゅう話をしていた．そういうことができたらいかがでしょう．そうすると，聞いているほうは，だったら俺もあったよというような，無駄とは言わないけれども，そういう時間が必要じゃないかと思います．

以前，若い新卒の女性の方がお亡くなりになったときに，職員室での語らいが少なくて，もともと先生方が話ができるスペースがあったのに，片づけられてしまって，それさえなくなってしまった．それとは逆だと思うのですよね．やはり何か話ができるスペースというのは必要で，そこでいろんなことを言うことが，盗む力につながると思います．１言ったら１しかわからないかもしれないけれども，10言って１拾ってもらえばよかったというぐらいで，当面ダメと考えている先生がいたら，それで勝負したほうがいいと思うんですね．１言って１やってもらったらこれはもういい．昔，私たちの頃は，当然１言ったら10できないとだめという時代だったかもしれませんが．だからその努力は今後，私たちの肩にかかっているんじゃないかなと思うんですよね．それが一つですね．

もう一つは，先ほども言った，付箋紙を使う方法がベストだとは決して思っていません．言いたいことは，教育観を盗むということです．子どもをどう捉えているかということだと思うのです．エビデンスを出せというのは，授業中に起こっていたことの，こういうことから私は見つけましたと言うわけですから，どういう見方をすればいいのかということを教われるわけです．それは手取り足取り教わるのではなくて，その機会に出てきた言葉の端々から，この先生はこんなことを考えている人なんだなということを盗む．それが力をつけていくことにつながるのではないでしょうか．繰り返しますが，参観したらどこかで見て，この子はどうしていたかというような話をする．若い人が嫌がるかもしれないけれども，教室をちょっとのぞいて，「あの時こういうことやっている人がいたよ」ということを言えばいいのではないかと思うわけです．

自分が校長をしているときには，私は直接子どもに向かって話をするということはあんまりしなかったけれども，クラスに行くと，担任によっては私に振るんですよね．それがきつかったときもありますけれども（笑）．ですから，ちょっと子どもを見て，集中していない子のところへ行って，ちょっとちょっかいを出して，そっちに向けさせる，などということが私の仕事だと思っていました．

あとは，「こんなことをいいですよ」というような話をちらっとすると，何人かの人は翌日，クラスでそれがすぐ採用されているということがあるんです．もちろん，私もうれしいけれども，そういう人たちはやはり話を聞いて，自分を改善していくような気持ちがある．そういう人たちを応援していくということが必要ではないかなと思うのです．

だから，こちらからいっぱい伝えないと，できない時代にはなってきている．こっちが投げちゃったら終わりですよね．

■**佐々田**　私どものほうでは，これは大変な課題だと思っています．ご承知のように，由利本荘市はこの10年間で，九つの学校の統廃合がありました．そのように生徒，学校が減少しているということが一つ．それから，由利本荘の場合は，周辺の方々から応援をいただいた人事異動を多くやっている関係．それから今年，この春で定年退職者が７名，来年も７名くらい．校長先生が定年退職するんですよ．ということを考えると，若い人という感覚が，もう県の方にお任せしている状況で．市教委としてどうするかというのは，かなり困難な状況です．ただ，他県から視察にまいりますので，その視察者を各校に分散して，ここの学校を紹介しますというように受け入れてもらって，そういう機会に校内研修をやってもらうとか，あるいは，校内研修は年５，６回ぐらいやっているわけですので，それに加えて県の教

Akita University

育委員会訪問とか，市教委訪問とか，学校にかなりの回数そうした方々が入り込んでいますので，そういう研修の在り方をしながら，若い人たちを育てているというのが，一つの実態になっています．

こうした研究機関の方々とも十分交流しながら，研修を重ねていかなければいけないのが，やっぱり未来の由利本荘市かなと，このように思っていますので，どうかご協力よろしくお願いしたいと思います．

■浦野　続きをちょっとやらせてもらいます．校内研修を活性化した事例です．秋田県じゃありません．ほかのところでちょっと私がかかわっていて．研究主任が，向こうでは研究部長と呼んでいましたが，研究部長がやっぱりどれだけ頑張るか．その人が頑張ったときに，それを背後で支える若手が何人かいる．結構若い人が多い学校だったんですよね．だから，秋田に比べると，若い人が多かったかもしれません．だけど，それで乗ってくる人がいると，学校が急速に変わっていくという例を見つけて，そんな報告をしたことがあるのです．結論から言うと，頑張れば，学校は変わっていくと．その際に，部長さんがやった広報だとか，若手だとか，そこで部長がいろいろ気づく．気づいたことを若手に広めていって，それが広がっていくということが，その学校では多かったような気がするのです．だから，どなたかが，言い出しっぺがいて，言い出しっぺが動きだしたときに，それを支える人が，トップダウンではなくて何人かいると，うまくいくのではないか．そのときに，もしかしたら，今日の私の話で言えば，ちょっと上の先輩を呼んできて，そこにつけ加えてもいいのかもしれない．そんなことをしていただけると，活性化するのではないかなと思います．

■佐々田　この校内研修が，実は秋田県も盛んなんだけれども，よその県も盛んです，今ね．われわれといろいろ協定を結んだり，いろいろ参考にさせてもらっている県は，ほとんど資料を持っていって，やっています．恐らく，本当にテストの平均正答率は肉薄されてきていますけれども，それ以外はかなり，多くの面で当然発達しているということ，これはわれわれ覚悟していなければいけないんだろうと思います．

ちょっと紹介しますと，われわれは大阪府箕面市と教育協定を結んでいるんですが，箕面市の先生方が大量にわれわれのほうに来て，授業実践をしていっています．われわれのほうからは，指導主事や校長が逆に箕面市に行って，いろんな校内研修会，それから市単位の研修会に講師として参加しています．私はそれを見ながら，いや，これは一歩リードするには，子ども勝負だということで由利本荘の子どもを箕面市に派遣しています．間違って認識されると困ると思っているのは，われわれが箕面市に行ったときに，ある先生方が，いや，生徒たちがやっぱりまじめでないと．校内環境，教室環境もちょっと，いろんな学習資料は少ないという判断をしてきているんですが，向こうの英語の授業にこっちから行った生徒10人が入ります．そうすると，向こうの生徒はものすごいファイトで勉強するんです．力を発揮するんです．英語のスピーチなんかも交流します．ですので，われわれが見てきたことが，それを正しいと思っていたら，大間違いだと．われわれは徹底してもっともっと学んでいく，学習指導を徹底して，交流していく必要はあると，考えているところです．

■佐藤　ありがとうございました．秋田方式が伝播していて，ほかの地域も改善が進んでいるということですが，広げることによって秋田自身も伸びていくような，そういったシステムを作っていくべきだし，形ではなくて，やっぱり本質をどう見抜き，本質をどう作っていくのかといったところですよね．アクティブラーニングもそうですけど，形式にこだわるあまり，逆にいいところが失われていくっていうことがないように，本当にしなければいけないんじゃないかなと思います．

それでもう一つの質問で，これは先ほどもふれられたんですが，最近，若い人は文章が書けないという話があって，自分自身も課題として考えていますと．若い人を教員として育てていくといった意味で，どういった意識や方法で若い人たちを指導していくべきなのか．また学生として今，聞く力，書く力を上げるために何が必要なのか，心がけるべきなのか．教員養成ですよね．教職大学院の若手の方も関係してくるかと思いますが，そういった若い人たち，本を読まないという話も出てきました．文章を書くというふうなこともなかなか経験として少なくなってきている．そういった人たちに教員養成としてどう接して，教員の卵を育てていくのかっていうことも，ずっと浦野先生あたってこられたわけですが，そのあたりはいかがでしょう．

Akita University

■**浦野**　難しいですね.「本を読め」と言ったって，言っただけで読むわけがないので，そういう仕掛けが必要になる．例えば，それは大学院のほうでしなければいけないことかもしれませんし，さっき紹介した私の論文，最初の論文を書くきっかけになったスライドを3，4枚お見せしましたよね．あれは，ここで言えば，うちの学部の附属小学校はここから２キロぐらいありますけれども，あの附属中学校は大学構内の道を隔てた目と鼻の先の距離にありました．そこの子どもたちがクラブの時間に来て，やっていた様子が先程のものです．それをやるときに，私の先生と附属中学校の先生が共同で，そういう研究を始めた．で，その際に人手が要るわけですよ．あとは子どもの直接勉強を見て，そこでやっている作業，プログラミングをやっていますから，その作業を手伝うのにも，ちょっと人手が要る．で,「おまえ手伝わないか」と言われて始めたのは，学部の２年生か，３年生の頃，最初の動き出しはですね．そのときに手伝ったことがきっかけです．

逆に言うと，自分は同じことを若い人たちにしたかというと，私の研究を進めるにあたっては，あまりしてなかったかなと思う．時々は院生を連れて，見に行こうとしたりはしていましたけど．その恩師の先生は結局，私をずっと引っ張って下さり，大学院の修士論文の，教育関係の論文と，専門の気象学の論文の２通の修士論文を書きました．その教育関係の１通は，先程言ったような，実践を動かすための自動化しているプログラムについて書くことを中心にした修士論文を書いています．

そういうところに私たちも学生を連れて行くことをもっとしたほうがいいのかなと思いますね．で，その際に，今，教職大学院はそれに近いことをやっているかもしれません．私の場合にはもっと直接かかわるようなことを，一緒にそこでプログラムを作るようなこともしました．

ですから，先程の佐々田先生の表現で言うと単元マップを作るような作業ですね．そこにも関わっていますね．また，先程の指導書にあるようなことを，そのまま鵜呑みにして授業してはいけないということと，そこで教科書も作りながら，子ども用のテキストを作りながら，自分でその授業もしているわけです．授業というか，ビデオを撮っておくわけですね．で，また子どもがやっている様子を見ていて，PDCAを自らそこでやっていることにプラスになる．こんな体験が今にも生きているような気がします．だから,全部が同じとは言いませんけれども，何か私たちが持っている現場に連れていく，連れ回すっていうことが必要かと思います．

そうなると,やはり学部の教員たちも同じように，現場ともう少しうまくやっていくことが課題かもしれないなということをちょっと思います．

それと，私が教育実習を受けているときに，あれだけの記録を書いてくれた先生がいたということ．そういう先生が何人かいて，そのことで育ててもらったということはやはりすごく幸せだと思っています．それが，つながっているのは，同じように教育実習生を受け入れた側も，その人たちにそういうことを教えて，ここであなたもっとこれを知っていたらね．もっといいものできるんじゃない．何か本を読んでいるかな．みたいな，そういうことを切り返して，学生に対しての信頼関係を築けばいいのかなと思ったりもしています．

■**佐藤**　そういった意味では，大学教員の力量も問われているっていう意味かと思います．でも，浦野先生みたいな人ばっかりではなかったわけですね．

■**浦野**　学生でですね．私はもしかすると特異，例外かもしれませんし，

■**佐藤**　教員自身もそこまで面倒見ている人だっていっぱいいたわけではないでしょう．

■**浦野**　ないと思います．いや，稀有かもしれませんけど（笑）．

■**佐藤**　それは先生たちも若い先生方を見ていて何か問題を感じられて，こうしてほしいっていう要望ってあります？

■**佐々田**　本当に若い先生方，非常に成長しようとする意欲と，教育にかける思いなどが，学校訪問のときにはよく伝わってまいります．で，非常に純粋だなと思ってもいますし，この人たちに将来を託せるんだなというような感情を持ちます．プラス，何を要望したいかというと，やっぱり現代社会の時事問題と自分の今やっている教材を結びつけて，子どもにまず，今の日本に生きている状況を子どもに感じさせる．時事問題が目的ではないです．時事問題を扱うことによって子どもが今，この社会で私は生きているんだよと，存在しているんだよというのを，教材をとおして，学習をとおして，ちょっとふれさせられる．そして，将来，こうして頑張っている人たちがいるよとか，何か結びつけてやれるわけです

Akita University

ね.

だから，そんなことを，これは読書をとおしてもいいでしょうし，新聞をとおしてみるのもいいでしょうし，テレビをとおしてでもいいでしょうし，現代的な課題に強い教員を少し期待したいなと思っています.

■**浦野**　そうすると，例えば，本を読むこともそうでしょうし，今の学生たちは新聞を読んでいる学生というのは非常に少ないですよね．だから，うちの学部は必修にするというのは難しいかもしれないけども，やはりそういうことも働きかけていくだけでも随分違うと思います．私たちが子どもの頃というのは，新聞を切り抜いて，天声人語みたいなのを貼ってきて，要約を書けというようなことが国語の授業では結構行われていた．このセミナーの３～６回目は鹿野川先生という東京の福生の中学校にいらっしゃった先生を呼んで，NIEの研修を３回ぐらいやっていますけど．現在は読売新聞で１カ月に一度，NIEの記事を書いたりされています．そんなようなことを含めて，やはり新聞とかかわることが一つ大事かなと思いますね.

そのほか平田（オリザ）さんが書いたように，子どもたちはしゃべらないのではないと．しゃべらないで済む関係を私たちが作っているんだと．だから，単語で済む家庭の会話だと，授業も発言しなくていい授業をやっているのではないのというようなこと．同じようなことを少し心がけていくと，このような事態から少しずつ子どもたちも変わる．同じように，「戦後っていつですか」と学生に聞いたら，わからないですね．こういう人たちが今，教壇に立とうとしているということもあるかもしれないということです.

■**佐藤**　ありがとうございました．総合的な学習の時間が始まってもう結構長くなって，そういった学生が入ってきています．総合的な学習の時間は，やはり，単に授業で習っていることそのまま教科の知識で，受験でということじゃなくて，やっぱり生きている，そこの地域で過ごして，社会の課題と結びつけて，自分の学力をそこで使って，どういうふうに生きていくのかっていうことを考えるというのが，眼目のひとつとしてあるんじゃないかと思います．でも，よく文科省の資料で出てくるように，「社会を変えられる」と思っている高校生とか，若者の率っていうのは極めて他の外国と比べても低いですよね．それだけ総合的な学習の時間をやっていながら，逆に低くなっていて，自分は変えられないんだっていうふうにあきらめてしまっている子どもが育っている．そういった人たちが教員になっていくということになると，いよいよ自己有用感みたいなものは低くなっていくし，社会と関わらないで授業を教えていて，学力が高ければいいやっていうふうに思ってしまうとすれば，それは問題なので，やっぱり私自身としては，学生自身も社会とのかかわり，自分が社会の中でどう生きていって，どういった社会を作りたいのかという意識をきちんと持って，いろんな学びをするといったことが，やっぱりまず必要なのかなという気もしないではありません.

そういったところでだいぶ時間もきたんですが，最後のところで今後の秋田の教育の未来を考えるということなので，今後どうあればいいのか．特にこの教育実践研究支援センターですとか，秋田県教委，市町村教委ということもありますけれども，どういったことを注文として，挙げられるのかといったところにふれていただいて，まとめていきたいと思います．いいでしょうか.

先ほどの打ち合わせの中で，やっぱり大学の教員がどういうふうに学校に関わって，つながりを作っていくのか．サテライトという話も出ましたが，やっぱりどういうふうに一体となって改善，改革を進めていって，未来につなげていくのかといったところは，やっぱりまだまだ秋田でも課題があるんじゃないかっていう話をちょっとされていたので，その点に少しふれていただいて，まとめにしていただければいいと思います.

■**浦野**　それこそとても難しい問題で，このセミナーを主催している教育実践研究支援センターは，教育実践研究を支援するセンターですから，大学としては開かれた大学を目指して，その大学が学校現場を支援していこうというスタンスだと思うんです．私はそういう気持ちで過ごしてきた．ただ，今後私がいなくなると，学部の教員全体がかかわって，特に教育学中心の先生方がかかわることにはなると思いますけれども，やっぱりちょっとスタンスが違ってくるかもしれません．それと，実務家の先生方が，非常に増えてきて，そういう先生が中心で，外に出ていっていただくことはできるし，先程のリタイアされた先生方が学校に入るのと同じような感

Akita University

じで，学校を支援することはできるのではないかなと思っております．

ただ，一つは，私みたいなちょっと現場とは違うところから何かものを言って，それが正しいかどうかは別として，多様な視点で教育を捉えなくてはいけないというところで言うと，違う視点から言える人が減ってしまうのかなという気が少ししています．だから，多くの人がサポートするかたちで－大学教員全体が一時やっていたし，今も少しやっていますけれども－教科教育の先生とその分野のプロパーの先生，専門の先生とがセットになる．例えば，理科の授業を対象にする研修であれば，理科教育の先生と，化学の専門家の先生が一緒に行って，化学の内容はその先生，授業のスタイルについては別の先生というような形でやるとか，そんなようなことをしながら，授業をどうしていくかっていうのが一つのキーポイントですよね．

もう一つは，もう少し広い意味でのカリキュラム，先程の総合的な学習などについて，もう少し私たち大学側も一緒に考えていく．20年たつという話でしたけれども，そういうことについても，世の中変わってきていますから，当然それに見合ったものだとか，先ほどの私のグラフを読んでというのだけではもちろんありませんけども，そういうような方法で出てきたときに答えられるようなものだとか，答える視点みたいなものを私たちが一緒に持ち寄っていろんな議論をすると，できる部分はあるのかなという気はするのです．

また視点を変えると，私たちの立場で言うと，県の教育委員会の研修・研究機関である総合教育センターがあるわけですよね．主として研修の場にはなっていますけども，やはり秋田県の研究，例えば「ふるさと教育」などをどう発展・活用していくかということを引っ張っていくところは，総合センターだと思うので，そちらとうちとの関係が今後もっと密になって，一緒にやっていく．形式的なことは，上のほうで会議というのは組織というのがあるんですけども，実務のレベルで，どうやっていくかというのはなかなかできてないことだと思います．これまでも，どちらかというと，個人と個人の間のことというのには，私が赴任以来，どうもそういうことには努力をしてきたつもりです．当初の切り込む口は個人と個人だと思うのですけども，この先，組織と組織としてどうしていくかということが大きな課題ではないかと思っております．

そういうところでは，やっぱり上がトップのこともそうですが，アイデアを出し合うのは，もう少し下の現場レベルがボトムアップで，下から上に上げていって，できるスタイル．そこで，課題を見つけながら進めていくということができる場所があるといいなというように思っております．それですべてができるかどうかはわかりませんが，上だけでやっていると，真の課題が見えてなくて，何か概念のお遊びをしているのに近いところがあるかもしれない，と思います．

■**佐藤**　ありがとうございます．佐々田先生からその大学に対する注文でも何でも．

■**佐々田**　この関係を結ぶ，一体になるには関連して共同でやるというのは，どうも難しいなと思っています．私も附属中におったときに，うちは大学の附属として幼小中，どんな共同研究やったのかと尋ねられると，やっぱりそれぞれめいめいなんですよね．ただそのめいめいの中にどうするかということは，研究したり，何かそれが一体となってやっていなければいけないだろうなと．特に研究主任を長くやって，教務主任をやったときに，それが常に頭にありました．国に呼ばれるとき，あるいは，東北に行って初めて一緒になる人もいるんですから．こっちで一緒にならないで．ですから，研究とか，先生これ，本当にそこにいても足りないですよ．ましてや，今公立の小中学校といっても大変です．今，西目小・中学校，アクティブラーニングのフィールド校になっていますが．で，これはどうしても融合一体でやれています．それは，私はコミュニティ・スクールのおかげかなと思っています，背景にそれがあるから．もう地域，幼小中高と結んでいるんです．それを年間何回か繰り返されていますから．ですから，われわれはこれから新たな課題として一歩進むのであれば，やはりコミュニティ・スクールの階段を一つ登って，連携がどうなっているのと見直す場面はあってもいいのかなと．このコミュニティ・スクールに対する期待も多いかもしれませんけれども，地域の協働です．まちづくりの共同でありますので，そういったところに窓口を求めています．

それから，ちょっと繰り返しになりますけれども，やはり教育は歴史認識を今も国家とか，世界単位の歴史認識とはまた違った，義務教育，あるいはその地域にある教育者としての認識の仕方はきちんと

Akita University

持っておくべきではないかというのが一点です．それから，その際には，あくまでも中高，小中，中高，そういう流れがどうなっているのかなというようなこと．それから，単元，指導を含めて，マップ作りはしておかなければ，これはどういう子を作っているのか，あるいは，どういう子に処方箋をどう与えたのか，逆に，議論されるときに課題が出てくるだろうと思います．そういう意味で，そうしたものを取っていかなければいけないだろうと．それに加えて行政側は一人一人の学校に伝達可能なように，管理だけの伝達ではなくて，指導も伝達できるようにやはり，そうした構想を練って，努力してもらえればと．それを切り開くのは，私は大学でないかなと思って期待しているところです．修司先生にはお世話になります（笑）．

■**佐藤**　ありがとうございます．大学としても，秋田県内でどういったことが行われているのか，アクティブラーニングにしても，カリキュラムマネジメントにしても，コミュニティ・スクールにしても．きちんと把握をして，分析をして，その結果を提供していくということを，本当は考えていかなければいけないんだろうと思います．年に１回，公開のときに出かけていって，コメントするだけではその本質が見えるわけではないので，やっぱり日常的なかかわりをどう作っていくのかということも課題ですよね．

またそうはいっても，人的・財力的な条件がないわけですが，教職大学院は特に現職教員の院生の方，自分の勤務校のことを研究課題にしていただくというのを一つ掲げていて，実践と理論，その融合ということがいわれるわけです．そういったかたちで現場の先生方の研究，それを全体として集約して，というかたちも今後考えられるんじゃないかと思って，その点でも大学と皆さん方，こういう関係とを今後ともよりよいものに見直していく，改善していくということも考えていければと思っております．浦野先生，佐々田先生もそうですけれども，これまで作り上げてこられたものを，ぜひ次の世代に引き継いでいくというのが，次の50代，40代の人たちの責任でもあるわけですので，そういったところを少しかみしめながらというふうにしたいと思います．本来であれば，フロアの方からもう一度質問とか意見などを取れればよかったんですが，時間の関係で，ぜひこのあと直接浦野先生，佐々田先生にご質問などをしていただければというふうに思います．今日は本当にどうもありがとうございました．２人の先生に拍手をお願いします．

（終了）